

[パネル 3B]

「ブンチャック・シラット」を超えて
—ローカルな社会的実践としての武術の多義性—
Beyond “*pencak silat*”:
Different faces of martial arts as a local social practice

趣旨説明

増野亜子（東京藝術大学）

MASHINO Ako (Tokyo University of the Arts)

ブンチャック・シラット *pencak silat* は東南アジア島嶼部に固有の伝統的な護身術・武術として一般に知られる。しかしその実態は古くは実戦的な格闘術から、近代西洋的なスポーツ競技、精神的・身体的な修養、人生儀礼や宗教儀礼での演武、舞踊的な上演形態まで多岐にわたり、狭義の「武術」の枠を超えた多面性をもつ (Paetzold and Mason 2016)。近年のインドネシアのシラットはナショナルなスポーツとして競技化、制度化が進む一方で、勝敗や技能の優劣を重視しない音楽伴奏を伴う演武や、その固有の動作を取り入れた芸能上演も行われている。本パネルはこのように一元的な定義や概念に収斂しきれない、ローカルで多義的な実践としてシラットをとらえ、ジョクジャカルタ (今村)、ジャカルタ (中村)、バリ (増野) における、それぞれ地域や文脈の異なるシラット及びシラット関連芸能の調査に基づいて論じる。

またここではシラットを実践する個人よりも、ローカルな共同体の中で社会的に習得され、伝承され、共有される社会的な身体技法としての側面に焦点を当てる。シラット実践をめぐる人々の社会的関係性は、身体技法の創造や伝承に大きく作用する一方、その過程での経験の共有そのものが人々のコミュニケーションを促し、実践者の間に社会的関係性を築くという循環がみられる。また身体技法と体験の共有を通して、シラットはローカルな共同体に固有の身体技法として培われる。他集団との差異は地域性・宗教性・民族性と結びつくことでしばしば共同体のアイデンティティの表象として扱われもする。パネルでは各発表者がシラットの競技化 (今村)、社会的交流 (中村)、舞踊化 (増野) に焦点を当て、それぞれの文脈においてシラットの身体性が共同性を構築していく多様なありかたを明らかにする。

[文献]. Uwe U. Päetzold and Paul Mason (eds.) *The Fighting Art of Pencak Silat and its Music: From Southeast Asian Village to Global Movement*. Leiden: Brill.

ナショナルな「ペンチャック・シラット」を創出する
—二つの演武の競技化を事例に—

Creating national “*pencak silat*”:

Case study of two types of turning martial arts demonstration into competition

今村 宏之 (総合研究大学院大学・博士後期課程)

IMAMURA Hiroyuki (The Graduate School for Advanced Studies,
SOKENDAI, PhD Student)

インドネシアで散見される武術的实践のうち、ペンチャック・シラットと総称されたものは、国民統合に資するスポーツ競技として再編されてきた[Wilson, I.D. 2002; Wilson, L. 2015]。その一方で、異なる出自や民族、系譜において継承されてきた武術の多様なありようは画一化の範疇におさまりきらず、統合の気運と無縁の集団もある。

本発表では、「ペンチャック・シラット」への統合に焦点を当て、二様の演武の競技化の試みを事例に、ナショナル・レベルで共有可能な競技形態を創出するための処理の特徴を明らかにする。とくに、全国組織インドネシア・ペンチャック・シラット協会が創出した演武競技・規定ジュルス(*jurus wajib*)と、既存の競技への代替案として草の根の結社タントウガン・プロジェクトが創出した振付演武コンテストの事例を検討する。

シラット協会は 1948 年の第一回国民体育週間を契機に結成され、1950 年代に中央政府の信任を得た。当初は学校教育への参入を目指したが、海外武術の流行に対抗すべく、諸流派が参加可能な競技の開発に力点に移り、1973 年に格闘競技の基礎が完成した。その後、同協会は格闘志向でない実践者のために演武会事業を展開したが失敗し、1990 年前後に演武の競技化がはじまる。10 年かけて標準化された演武競技からは音楽伴奏が排除され、創作的な振付の出番も減った。

標準化された演武の競技形態として創出されたのが 100 の動作からなる規定ジュルスである。ジュルス(*jurus*)は一般に実戦や演武での即興動作を学ぶための技の基盤とされるが、規定ジュルスに即興や技の再解釈の余地はない。同様に、結社タントウガン(2009 年結成)が創出した振付演武コンテストでも、ジュルスの位置づけが争点となった。本発表では、諸流派が一同に会する場面で施される、流派間の技の優劣に目を向けさせない仕掛けを指摘する。

- 【文献】 1. Wilson, Ian Douglas 2002 *The Politics of Inner Power: The Practice of Pencak Silat in West Java*. Ph.D Thesis, School of Asian Studies, Murdoch University, Western Australia./
2. Wilson, Lee 2015 *Martial Arts and the Body Politic in Indonesia*. Leiden: Brill.

[パネル 3B_2]

身体技法の伝播と地域的固有性

—ジャカルタの広域的武術流派と分派の事例から—

Propagation of Body Technique and Its Regional Specificity:

Case of Widespread Martial Arts Schools and Their Branches in Jakarta

中村 昇平 (京都大学)

NAKAMURA Shohei (Kyoto University)

ジャカルタ周辺では、近隣地域の生活に根差した「集落武術」ともいえる実践が広く営まれてきた。これは、オランダ植民地期、バタヴィア時代からの先住者集団であるブタウィ民族の文化実践として認知されている。ジャカルタ発祥の武術は、しばしば「ブタウィのシラット」(silat Betawi) や「こぶし遊び」(maen pukul) と総称されるが、その起源や内実は流派によって異なる [Nawi 2016]。植民地期から続く集落 (kampung) を単位とした帰属意識を色濃く残す地域では、様々に異なる流派の武術が、集落独自の伝統として営まれている。

ただし、そうした武術流派が全て当地発祥というわけではなく、継承の過程で他地域に伝播し、各地で継承されるようになった場合も多い。そのような場合、流派自体の発祥が別の集落にあると認識された上で、各地で継承される分派がその集落に固有の伝統として認識される。

本発表では、広範囲に伝播して多地域で継承されるようになったメジャーな流派をいくつか取り上げて紹介した上で、こうした広域的な流派が伝播と伝承の過程でローカルな集団に固有の伝統であると認識されるに至る要因を考察する。具体的には、デポック市のカンブン・ウタンで継承されるゴンベル流派を事例としてとりあげる。

ゴンベル流派自体は別地域 (東ジャカルタ、チラチャス) の発祥であることが広く知られているが、カンブン・ウタンの実践者たちは自分たちの分派を、カンブン・ウタンに固有の伝統として位置付けている。本発表ではこのことを、分派内の学習の実践と分派間の交流の実践に着目して考察する。前者では、既存の技芸の習得よりも新しい技の創出が重視され、後者では、競技や競合ではなく共通性・差異の確認作業を媒介にした社交が重視される。この分析を通して、身体技法の差異化と共有をめぐるコミュニケーションの実践が、地域の固有性を醸成する媒体となっていることを論じる。

【文献】 1. G.J. Nawi 2016 *Maen Pukulan: Pencak Silat Khas Betawi*. Yayasan Obor Pustaka.

[パネル 3B_3]

「舞踊」化したシラット
—バリ・ムスリムの芸能ルダットにおける音と身体動作—
Silat evolution as dance:
Sound and body movements in Muslim Balinese *rudat* performance

増野亜子（東京芸術大学）

MASHINO Ako (Tokyo University of the Arts)

バリ島のムスリム集落で実践されている男性の集団舞踊ルダット *rudat* は、ブンチャック・シラットと密接に関連して発展した芸能である。ルダットは男性の演者たちが杵太鼓の伴奏でムハンマドを讃えるアラビア語の歌詞を歌いながら、シラットに由来する武術的な身体動作を集団的に行う芸能で、ジャワ島やロンボク島でも行われているが、その歴史や伝播の経路については不明である。音楽を伴うシラット演武はインドネシア各地にあるが、ルダットは太鼓のリズムや歌の旋律とより密接に連動しながら、集団が、予め決められた動作を揃って行う点で、より定型化・様式化されている。武術性や即興性を抑制し、より様式化した動きを強調するルダットは、しばしばシラットを「舞踊化」したものと説明される。バリのルダットは多様な民族的・歴史的背景をもつ複数の集落に伝承され、主に共同体の祝祭の際に上演されてきた。にぎやかな音楽と衣装で戸外を練り歩くルダットは集落外で、他のムスリム集落の人々やヒンドゥー教徒の人々の前で上演される機会も多い。

バリのムスリム芸能に関する先行資料は少ないため、本発表では主にバリの5つのムスリム集落での調査資料に基づき、現行の芸能実践及び芸能者自身の解釈を手がかりにルダットの音と身体技法を分析からいわゆる武術的なシラット実践と舞踊としてのルダットの連続性と差異を明らかにする。(1)個人の技の優劣や勝敗よりも、共同性や一体感を強調する、(2)バリ社会の多数派であるヒンドゥー教徒の芸能と異なる独自の表現である、(3)シラット由来の武術的な身体技法と集団的な秩序が、勇敢な兵士であったとされる集落の祖先のイメージと統合されるという3つの特徴を通して、この芸能が集落の文化的アイデンティティー構築に大きく寄与していることを指摘する。